

Japonaise 突撃インタビュー

今月のお客さま

赤井 由絵 さん

音のズレやノイズも魅力のひとつ —トイピアノアーティストに聞くトイミュージックの世界—

今回は、トイピアノアーティストであり、音楽レーベル「Novel Cell Poem」のオーナー、赤井由絵さんにインタビュー！ 赤井さんは、沖縄・東京の2都市を拠点に、音楽制作・プロデュース・舞台演出活動をされるほか、ご自身も400台あまりのトイピアノを持ち、2021年には文化庁Arts for the future補助対象事業「100台のトイピアノ展」を開催。30年にわたり、おもちゃ楽器を使ったトイミュージックの普及にも努めてきた赤井さんにその魅力を伺いました。



子ども向けでも アバンギャルドOK!なフランス

◆現在の活動について教えてください

今は、トイピアノフェスティバルの開催や、舞台作品の演出、音楽制作をメインに行っています。元々は、1998年にトイミュージックのレーベルを立ち上げて、主にフランスのアーティストを紹介していました。トイミュージックの巨匠パスカール・コムラードやクリンペライ、ドラジビュスなどのミュージシャンのコンピレーションアルバムをHMVと一緒に制作し、当時はエクスペリメンタルミュージックの枠で紹介されてきた音楽にトイミュージックというジャンル名を新たに作り、広めていきました。

◆トイミュージックには具体的にどんな音楽がありますか？

決まった概念はないですが、おもちゃ楽器を使って作られた音楽として幅広く、インストゥルメンタルミュージックが多いのですが、先ほど話したドラジビュスは童謡をパンク風に演奏したり、アバンギャルドな感じもあって、キリンの被り物をして幼稚園ライブなんかもしていました。フランスでは子ども向けでもアバンギャルドなものを受け入れる文化があるので、こちらでは親子向けですが、日本では大人のリスナーに受け入れられています。フランスは子どもむけのショーやスペクタクル（公演）も大人が見ても十分楽しめるクオリティーで、ドラジビュスは移動サーカスの音楽も作っていて、私にとってもサーカスの音楽はすごく記憶に残っていますね。

◆他の国にもトイミュージックはありますか？

現代音楽としてはアメリカのジョン・ケージが発表したトイピアノ組曲などありますが、おもちゃ楽器を主役に据えたポップミュージックとしてはフランスのパスカール・コムラードが先駆者で、2001年の映画『アメリ』で一躍有名になる前から、フランスを中心にそのムーブメントが広がっていきました。自由な発想でおもちゃの音を取り入れて曲を作るスタイルが、私は好きですね。

それぞれ音色の違う ミシェルソンヌ

◆トイピアノについて教えてください。

古いおもちゃ楽器自体はアメリカ製や日本製のものが多いのですが、フランスのミシェルソンヌ (Michelsonne) のトイピアノは、クオリティが高く別格です。音量が非常に大きく、マイクがなくても小学校の体育館に響き渡るほどです。残念ながら現在は生産されていませんが、今なお新たなファンが増え続けています。

一般的にトイピアノは調律不要な反面、正確な音律のものはごく僅かです。でもミシェルソンヌはピッチのズレがほぼなく、ハンマーもしっかり連動するためミスタッチを防ぐことができます。適度な鍵盤の重みがあり、鍵盤幅もグランドピアノ等と同じでとても演奏しやすいです。音色も驚くほど澄んでおり、「おもちゃのピアノ」の一言では片付けられない魅力に溢れています。

◆音楽に関わるきっかけは？

クラシックピアノは3歳からやっていて、昔からオルゴールやグロッケンシュピールのキラキラした音が好きでした。音大卒業後は演奏よりも曲自体を作って録音することに夢中になり、その中



L'automne est un deuxième printemps
où chaque feuille est une fleur.

秋は第二の春であり、すべての葉が花になる
photo by Saori

で面白い音を探して、トイピアノやおもちゃ楽器を集めるようになっていったんです。当時はトイピアノを楽器としてメインで演奏している方はあまりいませんでしたが、今はブームになったこともあり世界中のアーティストからも弾かせてほしいと声をかけられます。

◆トイピアノに惹かれる理由は？

音色と小さくてかわいいデザインが好きなんです。それに同じメーカーでも作られた年代によって細かな仕様や音色が全然違うんですね。100台あれば100台とも音が違うし、ノイズも魅力でした。そこからどんどん集めちゃったという感じです。完全なものは期待していなくて、ちょっとずれていたり、カチカチ音がする感じもノスタルジックで好きです。

◆音楽から見るフランスの魅力はありますか？

今は少し変わってきている部分もありますが、フランスは文化的な自由度が高くインディーズでもアバンギャルドでも世界的な大ヒットを生み出すことがある。それはこの国ならではの気がします。マニアックでも突然日に当たったり、日に当たらなくても自由に音楽を作る、それが魅力だなと感じますね。

◆今後やってみたいことは？

人形劇が好きなので、生演奏と組み合わせたフェスティバルもやってみたいなと思っています。

Instagram

@ncpinc.yoshieakai



トイミュージック・スペシャル
コンピレーションシリーズ
Musique du Jouet 2

毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。

毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国



語り 斎藤丸ひろ子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

制作 tv asahi テレビマンユニオン ViViA) 企画協力 ビデオプロモーション 提供 TOKYO GAS

マダム愛のわたくし ミュラン

第153回

空間も料理も美しい

パリ11区にある「Maison Sota」は、パリでは珍しい戸建てのレストラン。扉を開けた瞬間から空気感がまるで違って、洗練されたご自宅に招かれたような気分になります。高い天井や落ち着いた照明、温かみのある空間も本当に素敵で、オープンキッチンから伝わる活気がこころよく、席に着いた瞬間から期待が高まります。

そして、お料理が本当に素晴らしかった。最初から最後まで「美味しい」が続くコースで、特に印象的だったのは魚介料理。貝や海老、白身魚など、それぞれの素材の良さを丁寧に引き出して、シェフ独特のプラスアルファな隠し味が感じられたり、想像もつかないような組み合わせが上手にマリアージュしていたり、それでいて繊細なのにしっかり旨味がある。どこか日本人の感覚にずっと馴染む味わいで、自然と心に残るお料理でした。派手すぎず、でも一皿ごとにちゃんと感動がある。火入れや香り、ソースのバランスまで本当に美味しく、気づけば

会話を止めて夢中で味わってしまうほど。

さらに感動したのがワインのセレクト。ペアリングが抜群で、お料理の魅力をより引き立ててくれるものばかり。グラスを重ねるたびに、その一皿がまた違った表情を見せてくれるのも楽しかったです。最後にシェフと直接ご挨拶できたのも嬉しい瞬間。この空間や料理の世界観を一人の感性が作り上げているのだと思うと、より特別な時間を感じます。

パリで特別なレストランを探している方に、ぜひおすすめしたい一軒です。

A. パリ市内で戸建てレストラン。 **B.** オープンキッチンから響き渡る活気あふれる声がさらに食欲を誘います。 **C.** 料理は全て文句なし！どれもこれもただただ美味しい。 **D.** シェフの渾身創太さん。19歳で渡仏し、「クラウンバー」などパリの名店で経験を積んだ後、2019年に「Maison Sota」をオープン。フレンチをベースにした繊細な感性の料理で、世界中の美食家から注目を集めている日本人シェフです。

writer マダム愛

東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらの。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。

blog マダム愛の徒然パリ日記

<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog マダム愛のアパートの鍵貸します

<https://www.madameai.com/>

今月のハート

料理 ♥♥♥♥♥♥♥♥
ドリンク ♥♥♥♥♥♥♥♥
サービス ♥♥♥♥♥♥♥♥
雰囲気 ♥♥♥♥♥♥♥♥
コスト ♥♥♥♥♥♥♥♥

Maison Sota
3 Rue Saint-Hubert 75011
01 43 38 61 95
<http://maison-sota.com>



癒し系フランス男子ギョームの

パリで茶柱シルブプレ

バカンス

——お茶の旅は、静岡県静岡市へ！

富 土山の麓にある茶畑を後にして… 静岡県静岡市本山へ！静岡駅から車で約25分。青々と輝く茶畑にすーっと身体ごと吸い込まれていきそうな、標高160～460mにある「いはち農園」繁田さんの茶畑を見学させていただきました。山と森に囲まれている茶畑や畑を、食いたしん坊な野生の動物たちから守るために、周辺の農家の方々が柵を設置。標高460mで吹く風は、とても涼しく心地良かったです。一面に広がる緑色の絨毯の片隅で、娘はせっせとお茶摘み。繁田さんの畑で採れた大きな甘いスイカを皆でいただいたのも、この夏の大切な思い出。

まだまだバカンスの余韻に浸っている当店。京都の「加茂自然農園」山崎さんの和プーアル茶と玉露、鹿児島薩摩「長野製茶工場」長野さんの「はんず茶」も再入荷！生産者の高齢化により生産が途絶えてしまっていたが、長野製茶工場が2021年より製造を開始。水瓶の中で炒ったはんず茶（半壺茶）は、中村洋一郎『番茶と日本人』でも紹介されている鹿児島伝統番茶であり希少茶です。À bientôt！

writer ギョーム・ユルボー

パリにある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。 **Instagram** @chanoki_paris **HP** <https://www.chanoki.fr/>



標高460mの茶畑から



いはち農園の繁田さんと一緒に

パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんと
ゴキゲン指揮者キョーリのほのぼの生活

パリにゃん通信

「何があっても！」

先 日、誕生日を迎えました。すでに人生の半分以上ヨーロッパで生きていることとなりますが、最近また新しい人生のフェーズに入ってきたなと実感しています。

私個人の人生だけでなく、異常気象、戦争、AIの急速な普及と世界的にも今までとは確実に違う時代の流れを感じています。しかしAIがいかに発達していても揺るがないと私が信じているのが生の音楽活動。みんなで声を合わせて一緒に歌う合唱は、今後さらにかげがえのない貴重な時間になっていくと思います。フランスは仕事以外の交流の場が盛んで、若い人も退職者もみんな自分の好きな事を探し積極的に参加しています。何があっても仲間と一緒に笑って歌えることが私にとって最高の贅沢！さて、今日もみんなと歌ってきます！



何があっても猫は可愛い



writer キョーリ 押田杏里

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。 **Instagram** @abricotp

とびこめ! ミュゼのとびり

今更聞けないフレンチアート

狩猟という名の社交のひとつ ——18世紀、貴族の愉しみ

狩りという言葉をもとに掲げながら、描かれているのは獲物を追う場面ではなく、人々が食事や会話をを楽しむ光景が印象的なこの作品。1737年、フォンテーヌブロー宮殿にあるルイ15世の私的な居室の大食堂を飾るために制作されました。

作者は、ジャン＝フランソワ・ド・トロワ。18世紀前半のフランスで活躍し、歴史画や宗教画、神話画を手がけたほか、「タブロー・ド・モード」と呼ばれる絵画の先駆者でもありました。タブロー・ド・モードとは、当時流行していた衣装や室内装飾、上流階級の余暇や男女の恋愛模様などを題材とする絵画のこと。

作品に目を戻すと、木々に囲まれた野外の食卓では、狩りの合間に男女が昼食を楽しんでい

ます。華やかな衣装に身を包んで身を寄せ合い、会話を交わす姿から、親密で優雅な社交のひとつが伝わってきます。

当時、狩猟は王侯貴族にとって重要な娯楽で、人々が交流する機会でもありました。ルイ15世も狩猟を愛し、厳格な宮廷儀礼から一時的に離れ、親しい人々と過ごすひとときを楽しんでいました。18世紀のフランスでは、王室の居室装飾において、それまでの神話を題材とした作品に加え、田園生活や狩猟など、より親しみやすい主題も好まれるようになりました。こうした美的趣味の変化は、摂政時代に始まったものです。

摂政時代とは、ルイ14世の死後、幼いルイ15世に代わって、オルレアン公フィリップが摂政として政治を行った1715年から1723年までの時代です。その頃、政治や文化の中心は、ヴェルサイユからパリへ移り、自由な気風のもと、新しい芸術や文化が花開いた、華やかで活気に満ちた時代でした。

実は、この作品と対になる、鹿狩りの場面を

「狩りの昼食」

ジャン＝フランソワ・ド・トロワ / ルーヴル美術館蔵
写真: Sammyday / Wikimedia Commons (Public Domain)



描いた《Le Cerf aux abois》(追い詰められた鹿)という絵画も注文されていたが、現在、所在はわかりません。見てみたいですね。

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史 & 日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/m/md750819c9bc7>

仏人添乗員リラの

日本リラ散歩



「浮気」の線引きは?

数年前、日本に来て驚いたことの一つに、日本に住み始めてしばらくした頃、ポストに「浮気調査」「不倫調査」という文字が書かれ



浮気探偵

たチラシが入っていて、驚いたことを覚えている。

日本で暮らしていて印象的だったのは、男性向けの「性風俗」の存在を身近に感じることだ。実際、2022年に20～49歳の日本人男性4000人を対象に行われた調査では、約48%がこれまでに有料の性的サービスを利用したことがあると回答している。利用経験者の64%が既婚者だった。友達同士や、仕事の上司と部下でも風俗に行くという話を聞くこともあり、パートナーが許すかどうかは別として、男性が利用すること自体が比較的オープンに語られていることに驚いた。

一方、フランス人は「浮気も多そう」というイメージを持たれることがあるかもしれないが、実際にはどうだろう。2000人を対象にした2025年のIFOP*の調査では、これまでに恋愛関係を経験したフランス人の31%が、人生で一度以上浮気をしたことがあると回答した。ただし、そのうち、現在も浮気をしていると答えた人は4%だった。また、女性の経験率は2016年の

33%から2025年には26%に低下している。そして、「浮気をする」のではなく、最初からパートナーと話し合い、関係をオープンにする人も一定数いる。同じ調査では、パートナーがいるフランス人の8%が「オープンな関係」にあると回答した。

恋愛感情がなければ浮気ではないのか。風俗なら許されるのか。それとも、パートナーに隠れて性的な関係を持つこと自体が浮気なのか。日本で暮らすようになって、「浮気の多さ・少なさ」よりも、そもそも何を浮気と考えるのか、その線引きそのものが人やカップル、文化によって違うのだと改めて感じるようになった。

* Institut français d'opinion publique : フランス世論研究所



writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とベランダの植物の世話。

トモクンの

アレコレ、パリコレ、ナンザコレ〜

2003年以来的熱波襲来 地獄のメンズコレクション

2003年のカニキュール(猛暑)は、フランス全土で1万5千人ほどの死者を出しました。酷い目に遭ったと思いましたが、今夏の熱波も大変しんどかったです。1週間だけで終了、というわけではなく、何度もしつこく繰り返し襲って来て、総日数は何と52日間。2022年の33日間の記録を更新しました。全く心休まらない。特に酷かった6月17日から7月2日に掛けての熱波は、メンズのパリコレクションと丸々被っていて、毎日が辛かったです。特に夜。建物全体が温まっているため、室内は31～32度から下がらず、サウナの中にいるみたいで眠れない。凍らせたペットボトルを抱き締め、何とか仮眠を取るような状態でした。

パリ市内では景観が重視されるため、室外機

を外に出せず、つまりはエアコンの設置がほぼ不可能。ということで、少数ながら簡易エアコンを購入して凌いだ人もいたよう。ただ、暖気を放出するための太いホースを窓の外に出す必要があり、窓は開けっ放しとなります。でも、それでは部屋の空気が冷たくなりません。ホース以外の窓の空間を閉じないといけません。もちろん、そのためのパネルは生産されているのですが、何となく非効率的。結局、景観も損なわれそう。何とも冷房後進国なフランスです。

メンズコレクション中の土曜日には、必ずLGBTQの人々によるデモ行進『ゲイプライド』が行われますが、今年は9月に延期となりました。また、エイズ患者への連帯を示すためのイベント『ソリデイ』は中止に。以前、こちらで触れた消防署でのダンスパーティも中止です。そして、一晩だけでしたが酒類の販売が禁止に。すでに消防隊員の出動が超過状態で、お酒による健康被害を少しでも減らすための措置だったそう。

こんなにも禁止・中止事項があったのかか

わらず、メンズのパリコレクションはしっかり決行。もちろん、会場では大型扇風機を導入したり、水を配ったり、ショーによっては予定時間通りに始めるために早目の来場を促すなど、配慮は見られましたが。ファッションってやっぱりブラックな業界、と痛感したのでした〜(泣)



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ『友くんのパリ蚤の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩
<http://tomos.exblog.jp>

乳がん検診と寄生虫検査
インニューヨーク

私 もめでたく45歳となり、ニューヨークで初めて健康診断をしました。マンハッタンで日本語が通じる数少ない内科のうち自分の保険が効くクリニックは二つ。早く予約が取れるほうで、と「もう9月からこのクリニック閉めるんだよ～」とやる気のなさそうな日本人のお爺さん先生に基本的な検診をしてもらい、乳がん・子宮がん検診、大腸検査や胃カメラは専門クリニックに紹介状を出されました。乳がん検査は日本語の通じないクリニックですが、夫は仕事なので初めて一人で行くことに。遅めの自立の時がやってきました！

紹介状のおかげで無事受付を通過。菜箸のように爪の長い看護師さんに更衣室に案内され、「これに着替えてね」と何やら出して指さす方向に検査着10着。どれや。多分一日分を今出した。着替えるとすぐ、検査技師のお姉さんに名前を呼ばれ、マンモグラフィー検査室に入ると凄まじい甘いにおい。10秒前までドーナツ食ってたな？甘いもの好き技師さんは慣れた手つきで私の乳首に



絆創膏を張って、ナンのように乳を伸ばし撮影スタート。って、お姉さん隣にいて平気ですか？共にレントゲン？いつもより頼もしい感じで検査は終了。日本より痛くなかったけど、私の乳のナン化に伴うものだと思います～。

そして大腸検査は日本人の消化器内科さんへ。「腹が弱いんです」「いつからですか」「パリに住んだ時を境に。きっとトイレが少なかったのがトラウマになったん……」「(食い気味に)それはおかしいですね。もしかしたらパリで何かあったのかも」あれよあれよという間に、カメラ検査より先に寄生虫検査をすることになりました。便を掬って入れた筒を4本送らないといけません。しかも、水に落としてはいけない。「水に落ちる前にキャッチしてください」ええ！どうやって！さらに奇しくも、アメリカでは野菜にくっつく寄生虫サイクロスポラが大流行中。「寄生虫検査場にアメリカ中の便が集まっているため、検査に時間がかかるそうです」。看護師さんも半笑い。いろんな仕事があることを知る。ちなみに結局AIに相談して、便座にサランラップを敷くことで順調に採取できています。パリで何をゲットしたのかの結果は乞うご期待！

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISSETTE を設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

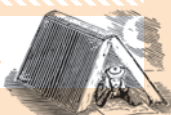
podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>



▲9.11から25周年のライトアップ
◀回転チーズレストラン「pick and cheese」へ！

本ソムリエ・ムッシュブルドンの

トレット・ファクワレル



漫画+フランス=マンフラ

「マンフラ」って知ってる？「フランスの漫画」のかばん語だ。日本漫画とアニメーションが80年代以降のフランスで巻き起こした社会現象から出現したジャンル。その代表的な作品は『ラディアン』だとも言えるだろう。現在10ヶ国で出版されているこの冒険ファンタジーは、絵柄はともかく上手いが、メリハリのあるストーリー展開や完成度にも作者の才能が見られる。実は日本のアニメ界も『ラディアン』に興味を持ち、2018年にNHKでアニメ化されている。

物語は破壊神のような怪物ネメシスが存在する世界。ネメシスを倒せるのは魔法使いだけだ。主人公である魔法使い見習いのセトはある日、そのネメシスと対決して大失敗を起こしてしまい、冒険物語の歯車を回し出す。そこからは仲間との出会い、異端審問官たちとの戦いなど、驚異の世界の危険と幻と出会って冒険する。

フランスではジャンルとしてマンフラは主流ではないが、日本漫画様式の影響を受けたバンドデシネは珍しくない。『ラディアン』の作者でさえ、

『ラディアン』トニー・ヴァレント

Euromanga

© EUROMANGA L.L.C.

Radiant © Ankama Editions,

by Tony Valente



日本の単行本サイズのマンガを描くまでは、バンドデシネの60頁以内カラーのアルバムで幾つかの作品を発表している。80年代生まれの彼は日本アニメや漫画の影響を受けて制作するが、前の世代の作者たちにはアメリカ、ベルギーやイタリアのマンガ家の影響もあった。フランスにおけるマンガ出版では、国内のみならず昔から海外作品も普及して、フランスの読者は様々な絵柄や物語に親しんでいる。その土台があったからこそ『ラディアン』のような作品が人気を集めたのだろう。

2013年にフランスで発表されたこの作品は19巻が2024年に発売された3ヶ月後に日本語版も刊行され、セトの物語が10年以上にわたって未だに続いている。

writer ジャンマリー・ブルドン

福岡在住のフランス人。福岡で仏語教室やフランスに関わるイベント企画を通してフランス文化普及に貢献する。Nautilus主宰。

Instagram @libr_nautilus

日本で使われている
フランス語、
本当はどういう意味??

カシュクール

前身ごろが重なっている服のことを言います。が、もともとはフランス語、カシュ (cache : 隠す) クール (cœur : 心臓) という意味。すなわち心臓を隠す、ということね。そういう意味では着物もカシュクールですね！カシュを使った言葉は結構あって、かくれんぼはカシュカシュ。カシュポなんていうものもあります。カシュポというのは植木鉢を隠す入れ物。素敵なおデザインを施したアンティークのカシュポもあるんですよ。

ノアゼットプレス公式ポッドキャスト

「カフェノアゼット第43回」より編集部が抜粋し要約。

編集後記

★遅い夏のバカンスに隣国カンボジアの世界遺産アンコールワットへ。言うまでもなく圧巻。特に私好みだったのは人々の暮らしが刻まれた石のレリーフ。1000年前の人々を覗き見してるみたいで楽しい～！また行きたい国です。(編集Y) ★パリ五輪以来、セーヌ川のクルーズが人気だとか。名所を巡るだけでなく、船上でランチやディナー、ライブ、果てはヨガやフィットネスまであるらしい。船上でエアロバイクってどんな感じ？ (AD.F)

